

# 柳田国男の「生業」研究をめぐる一考察

## 1910年代から1930年代の論考を中心として

A Study of Yanagita Kunio's "Subsistence" Research :  
Focusing on the Discourses of the 1910s to the 1930s

松田睦彦

MATSUDA Mutsuhiko

はじめに

- ①柳田国男は「生業」研究を狭隘にしたか
- ②農政学と民俗学における「生業」論の連続性
- ③柳田国男の「生業」論

おわりに

### 【論文要旨】

小稿は柳田国男の1910年代から1930年代の論考を紐解くことによって、当時の「生業」研究の目的と手法を再確認し、その可能性の一端を示そうとするものである。

一般的な柳田の民俗の資料分類の理解では、今日の生業に関わる分野は第一部の有形文化に分類され、第三部の心意現象に比して研究の中心とはならなかったとされる。また、農政学に「挫折」した柳田が、農政学との距離を因るために、故意に「生業」研究を矮小化したという意見も見られる。しかし、民俗学成立期の柳田の論考を検証してみると、その理解が改められなければならないことは明白である。

柳田は1910年代から農政学を離れ、民俗学という新たな学問の確立に邁進するが、そこでは農政学時代からの「生業」に対する視点が継承され、より同時代的なものへと深化した。その過程は、『都市と農村』等の論考から読み取ることができる。

柳田の「生業」研究の眼目は、農民の抱える同時代的な問題を、彼らの今日までの生活の歴史と、彼らが築き上げてきた生活観念の理解を通して解決に導くと同時に、農民たち自身が自己省察するに至らしめることにあった。この目的を果たすためには、官界や学界の指導を上から押し付ける農政学という手法は適さなかった。そこで柳田自身が新たに興したのが民俗学というフィールドであった。つまり、民俗学の成立の一端に、柳田の「生業」へのまなざしの深化が関わっているのである。

今日の生業研究と柳田の「生業」研究とは位相を異にするものである。けれども、あるいは、だからこそ、隣接諸分野との協業のなかで発展し続ける今日の生業研究が、民俗学としての論理と理念とを再確認する上で、柳田の「生業」研究から学び得ることは多いはずである。

【キーワード】柳田国男、生業、労働、農政学、三部分類